# 笹川地区が新聞各社で特集されました。

①（記事提供：北日本新聞）

## せせらぎの山里 朝日町笹川から ＜1＞

### 高齢化

# 退職後の世代が奮起

朝日町中心部から車で約10分。国道8号横尾西交差点を山側へ曲がり、トンネルを抜けると、四方を山に囲まれた笹川地区に着く。2級河川の笹川が流れ、川沿いを走る県道の脇に古い民家が立ち並ぶ。

50年前の笹川地区には住民が千人余りいたが、働き口や生活の利便性を求めて住民は地区を離れた。過去10年でも100人が減少し、現在は117世帯281人が暮らす。高齢化率（65歳以上の高齢者の割合）は47％を超え、町内全地区の中で最も高い。

「将来に危機感がある」。笹川自治振興会長の小林茂和さん(67)は話す。現在も消防団員の確保は困難で、今後は神社の維持管理や草刈りなど行事の継続に不安があるという。

ただ、小林さんの口調に悲壮感はない。2009年に復活させた盆踊りは地区外にも知られる人気行事となり、特産品のブランド化にも取り組む。県の定住促進のモデル地区に選ばれ、昨年に住民らでプロジェクトチーム「かがやき」を立ち上げた。

活動の中心となっているのは、ここ10年ほどのうちに会社などを定年退職し、地域に関わるようになった世代だ。

「残っていたマンパワーに火が付いた」と小林さんは誇らしげに語る。「元気がない所に人は集まらないでしょう」

小高い山に囲まれた笹川地区。地域おこしの取り組みが注目を集めている

②（記事提供：北日本新聞）

北日本
（第3種郵便物認可）

## せせらぎの山里 朝日町笹川から ＜2＞

### 盆踊り

# 出身者の声受け復活

笹川地区の盆踊りは2009年に復活し、今や地区を代表する行事となっている。

復活のきっかけは、その前年に都内で開かれた東京笹川会の総会だった。東京に住む出身者の会員に加え、笹川地区の住民も数人参加。総会後の懇親会で自然と思い出話に花が咲き、かつて行われていた盆踊りの話題になった。

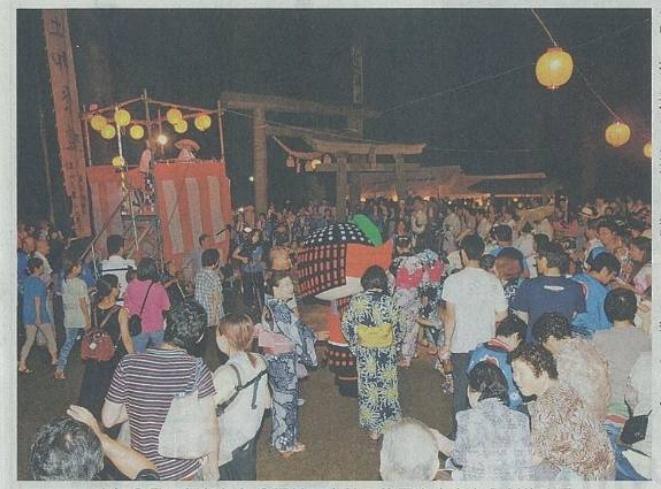
地区の盆踊りは、正覚寺と諏訪神社で行われていた。地区外からも多くの人が訪れていたが、盆踊り以外にも娯楽が増え、若い踊り手が減り、1999年を最後に途絶えていた。

懇親会で「帰省しても寂しいね」と言われ、前笹川自治振興会長の竹内康博さん(69)は盆踊りを復活させようと考えた。「あまり深刻に考えないで、自分を含め、みんなで楽しめるものにしよう」。翌年に自治振興会に実行委員会をつくり、10年ぶりに盆踊りを復活させた。

会場は諏訪神社。平安末期の武将、木曽義仲の命で建てられたとされる。樹齢400年を超えるスギの木々に囲まれた境内にやぐらが組まれ、音頭取りの声が響く。浴衣や法被を着た住民たちがやぐらを二重三重に取り巻いて踊り、その周りにも多くの見物客がいる。

竹内さんはにぎわう様子を見て「笹川はまだまだ捨てたもんじゃない。先人からの地域のつながりが残っていることを感じた」と振り返る。当初は1年だけのつもりだったが、予想以上に反響が大きかったため、翌年からも継続。昨年で6回を数え、地区外のファンも増えてきた。

10年前から東京笹川会と合同で旅行を実施し、交流を深めている笹川友愛会（老人会）の元会長、折谷武さん(80)は「出身者の古里への愛着が盆踊り復活につながった。北陸新幹線が開業すれば、もっと来てもらいやすくなる」と言う。ことしも故郷を離れた人たちと再会できることを楽しみにしている。


昨年8月に行われた盆踊り。大勢の住民や出身者らが集まる

③（記事提供：北日本新聞）

（第3種郵便物認可）　北日本

# せせらぎの山里 <3>

朝日町笹川から

## ブランド化で地域の絆

### 特産

初夏にホタルが乱舞する光景は、笹川地区の自慢の一つだ。笹川自治振興会では2年前から、コメやワサビ、ミョウガ、炭などの特産品に「さゝ郷ほたる」の名を冠して販売している。清流が残る自然豊かな地が生み出す「笹川ブランド」を売り出そうと、さまざまな取り組みが続いている。

その一環が、ホタルをモチーフにしたキャラクター「ささ坊」。地区に事務所がある「入江美研」（同町殿町）の入江修三さん(68)と、長男で元アニメーターの大助さん(37)がデザインし、名前は住民から公募して決めた。特産品のチラシなどに使い、親しみやすさを演出している。

地区を流れる笹川沿いの耕作放棄地を整備した農地にも「ホタル農園」の名称が付いている。ここでは新しい特産品として、2011年から実バラが栽培されている。

実バラは花が咲いた後、直径1・5センチほどの実が赤く色づき、生け花などの観賞用に使われる。サルなどによる農作物被害を受けにくい特徴もある。20アールに岐阜県高山市から取り寄せた500株を植え、12年から東京・大田市場に出荷している。

笹川自治振興会啓翁桜・実バラ研究グループの代表、深松博幸さん(74)によると、実バラは寒暖の差で実の色づきが鮮明になる。夏に西日が当たらない山の麓にあるホタル農園は、実バラの栽培に適しているという。

市場での人気は高く、出荷量を増やしてほしいとの要望もある。しかし、グループのメンバーは70歳前後の男女25人。限られた人数では現在の栽培規模が限度だが、深松さんは「量より技術をもっと上げ、品質の良い実バラを作りたい」と意気込む。

「何より、お年寄りが作業のために家を出て、仲間たちと世間話をする場があることに意味がある」と深松さんは言う。笹川ブランドの挑戦は、地域の絆を強める役目も果たしている。

昨年10月に実バラを収穫する深松さん

④（記事提供：北日本新聞）

（第3種郵便物認可）　北日本

# せせらぎの山里 <4>

朝日町笹川から

## 人とのつながり感じ

### 移住

築80年の古民家を改築した家に子どもたちの明るい声が響く。スイスで暮らしていた勝田民さん(46)一家が、朝日町笹川地区にある父親の実家そばに引っ越してきたのは、2013年8月のことだ。

滑川市出身の勝田さんは子どものころ、週末や夏休みなどに笹川地区の祖父母の家に来て、農作業を手伝っていた。冬は地区内の山にある三峰スキー場で滑りを楽しんだ。

大学卒業後、京都市役所勤務を経てスキー留学などで欧州で生活。スイス銀行に勤めていたホワイティング・クリストファーさん(63)と結婚し、長女のケリーさん(15)、長男のケイン君(13)、次男の春君(11)、三男の未来君(7)が生まれた。

スイスの山あいの村で暮らしていたが、移民が増え、学校では教師は足りず、教室はプレハブだった。治安が悪化し、近所の家が窃盗団の被害に遭うなど物騒な事件を見聞きするようになった。

11年3月の東日本大震災に勝田さんは大きな衝撃を受け「家族やふるさとを大事にしないと」と考えるようになる。翌年の夏、笹川地区で墓参りをした時、ホワイティングさんが「ここの墓に入りたい」とつぶやいた。

子どもたちの安全や将来を考え、一家は笹川地区に移住した。現在、勝田さんは町のスタディメイト（特別支援教育支援員）として働き、中学校のPTA役員も務める。ホワイティングさんは自宅で英会話を教える。

地区で暮らすようになり、近所の人が野菜を持ってきてくれることもあれば、雪かきを頼まれることもある。ホワイティングさんは「スイスの人は関わりを持ちたがらないが、ここの人は親切」と話す。子どもたちも学校で文化の違いに戸惑ったが、今は環境に溶け込んでいるという。

「欧州で暮らした20年間に感じられなかった人とのつながりがある」と勝田さん。「笹川に来て正解だった」と笑顔になった。

スイスから笹川地区に移住した、左からケリーさん、春君、ホワイティングさん、勝田さん、未来君、ケイン君

⑤（記事提供：北日本新聞）

（第3種郵便物認可）　北日本

# せせらぎの山里

朝日町笹川から

<5>

## 定住促進

# 古民家使い農村体験

山々に囲まれた自然豊かな環境、地区が一つの家族のような人の絆、町中心部まで車で約10分の立地―。その良さが見直され、新たに暮らし始める人も見られる朝日町笹川地区で近年、本格的に定住を促進しようという動きが出てきた。

北陸新幹線開業で首都圏からの移動時間が縮まることを受け、県は2013年、定住、半定住者の受け入れに意欲のある地域として、笹川をモデル地区の一つに選定した。住民たちも昨年1月、住居情報の提供や就労支援などの環境を整えようと、プロジェクトチーム「かがやき」を発足させた。

チームの実行委員長で笹川自治振興会長の小林茂和さん(67)は、子育て世代の定住促進の鍵として安全、安心の重要性を挙げる。「都会の安全を守るのは警備会社かもしれないが、笹川は住民のコミュニケーションで守る」。人口300人足らずの集落では、見知らぬ人や車が来ると住民がすぐに気付き、声掛けをすることが防犯につながっているという。

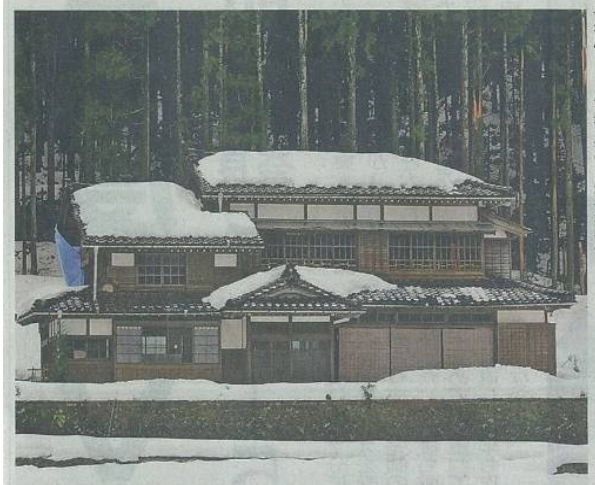
高齢化や人口減少に悩む地区にとって、移住者の増加は喜ばしい。一方で、田舎暮らしに憧れても、移住者が現実の生活になじめるかは分からないという課題がある。

そうしたマッチングの問題に対応しようと、町が地区内の空き古民家を改修して今春オープンさせるのが「ふるさと体験・農村体験施設」。移住を考える人らが宿泊し、住民の人柄や自然、文化に触れることができる施設で、自治振興会が指定管理者となる予定だ。

町にとっても人口減対策は最大の課題。事業を担当する町企画政策室の小杉嘉博室長は「笹川地区の人たちが地域おこしに本気になり、行政との歯車がかみ合い始めた。〝元気印〟の地区として他の地区に波及してほしい」と期待を込める。

小林さんは「施設でじっくりと地区を見てもらい、良さも悪さも分かってほしい」と話す。さまざまな取り組みが実を結び、いずれは子どもたちの声がこだまする山里に―。小林さんをはじめ、住民たちの願いだ。

＝おわり



改修工事が進められている「ふるさと体験・農村体験施設」

猿投台中学校の農村体験

# 地区の魅力DVDに

## 自然や歴史紹介　移住呼び掛けに活用

朝日町の笹川自治振興会（小林茂和会長）は、笹川地区をPRするDVD「住んでみたい里　笹川」を作成した。伝統行事や特産品、歴史などを紹介して魅力を伝え、移住を呼び掛ける。

### 朝日・笹川自治振興会

DVDを紹介する小林会長（左）と長井総務部長

ふるさとの良さを映像で伝え、地区に移り住む人を増やそうと企画。約15分間の映像を収録した。小高い山に囲まれて清流が流れる地区の自然環境や、実バラ、ミョウガ、ワサビといった特産品、獅子舞や盆踊りなどの行事を紹介している。移住体験ツアーなどの機会に使い、地区の魅力を分かりやすく伝える。

小林会長や長井昌弘総務部長は「住民が楽しく、仲良くしている地区の雰囲気を伝えたい」と話している。

70枚作り、同地区の多目的施設「共生の里さゝ郷」で販売している。1枚2千円。問い合わせは同施設、電話0765（83）3688。

### 盆踊り楽しむ

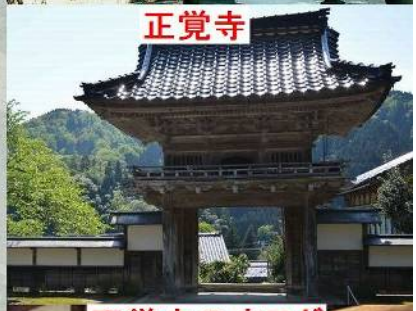
朝日町笹川地区の「笹川秋祭り」は笹川諏訪神社境内で行われ、多くの住民らが盆踊りなどを楽しんだ＝写真。北日本新聞社後援。

境内には地区内外から大勢の人が詰め掛けた。獅子舞が奉納された後、地区の特産品が贈られる「お楽しみ抽選会」が行われた。

2009年に復活した盆踊りがことしも行われ、浴衣や法被を着た住民らがやぐらの周りに輪をつくって踊った。

諏訪神社

正覚寺



正覚寺の寺ヨガ

⑥（記事提供：北日本新聞）

⑦（記事提供：北日本新聞）

地域ワ

# 朝日の住み良さ知って

朝日町の住み良さを都市圏の人々にアピールしようと、あさひふるさと体験推進協議会（加藤好進会長）の移住交流体験ツアーが1日、同町内で始まった。東京などから田舎暮らしを考えている人々が参加し、先に移り住んだ人らから町の魅力を聞いた。

## 移住交流体験ツアー始まる

笹川地区の風景を眺める参加者

北陸新幹線の開業によって交流人口が拡大し、地方に移住したり半定住する人が増えるという可能性を見据え、町の自然や文化を知ってもらおうと企画した。東京、埼玉、愛知の3都県から3家族4人が訪れた。

## 東京・埼玉・愛知から3家族

笹川地区では、平安末期の武将・木曽義仲にゆかりがあるとされる諏訪神社を訪問した。住民らから歴史について説明を受けた後、周辺を歩き、山に囲まれた川沿いの景色を眺めた。

一行は、昨年に同地区に移住したチェコ出身のコケシュ・ダヴィッドさん宅に移動し、ほかの移住者たちも交えて歓談した。参加者から「田畑を借りることはできるのか」「小学校までの通学手段はどうしているか」などの質問が出た。

参加者は同町宮崎の料理旅館に宿泊。2日はヒスイ海岸でヒスイ探しをするほか、特産のバタバタ茶作りにも取り組む。

⑧（記事提供：北日本新聞）

# 神向橋に生徒のイラスト

## 朝日・笹川 泊高校美術部デザイン

橋桁に設置されたイラスト

朝日町笹川の神向橋の橋桁に泊高校美術部の生徒がデザインしたイラストが設置され、除幕式が31日、現地で行われた。笹川地区の特徴であるホタルや桜が描かれている。

イラストは塩化ビニールシート製で高さ0・8メートル、幅10メートル。

昨年9月からことし1月まで行われた同橋の補強工事に合わせ、笹川自治振興会（小林茂和会長）が町の補助金を受けて設置した。

式では小林会長が「新幹線時代にふさわしいものを高校生にプレゼントしてもらった」とあいさつし、美術部の西村早織さんに感謝状を贈った。

坂口町建設課長と鹿熊正一県議、水島一友町議会議長が祝辞を述べた。

泊高校の高見祥子校長が「高校生の活気が地域の活気につながればうれしい」と話した。

⑨（記事提供：読売新聞）

# 空き家入居 住民が仲介

## 「世話役」任命 定住を支援

### 朝日町

空き家を前に「所有者と入居希望者の橋渡し役になりたい」と意気込む折谷さん（9日、朝日町笹川で）

少子高齢化が進む朝日町は9日、増加する空き家を地域活性化や移住・定住の促進に活用しようと、空き家所有者と入居希望者を仲介する「空き家コンシェルジュ」に、町内3地区の自治会幹部3人を任命した。地域の事情に詳しい住民が世話役となることで、入居希望者の要望に添った空き家を紹介し、地域に溶け込めるよう支援することで定着を図る狙いだ。笹原靖直町長は「空き家再生は地域活性化の鍵」と意気込んでいる。

コンシェルジュに任命されたのは、泊二区自治振興会の大谷邦寛会長(71)、境自治振興会の水島俊治区長代理(64)、笹川自治振興会住まいの提供チームの折谷克則リーダー(59)。

3人は各地区の空き家の分布や管理状況に関する情報を町と共有し、入居希望者と空き家所有者を仲介する。入居後は、地域の習慣や文化を紹介したり、祭りなど地域の行事への参加を呼びかけたりして、入居者が地域の一員となれるよう後押しする。

同町の高齢化率（65歳以上の人口の割合）は、県内市町村で最高の38・2％（昨年10月現在）。人口減少に伴い、2010年度582軒だった空き家は、13年度657軒に増えている。

一方、2010～13年度の4年間で計13世帯が空き家に入居した。これまでは町企画政策室が相談窓口となり、空き家の仲介を担当してきたが、地域に詳しい住民に仲介役を委託し、入居者のニーズにこまやかに応えることで、移住・定住をさらに促進しようと「コンシェルジュ」の設置を決めた。

町は来年3月まで沿岸部の境、市街地の泊、山間部の笹川の3地区で試験的に実施し、効果や課題を検証した上で、来年度以降、町内全域で取り組む方針だ。

県によると、空き家のデータベースや移住・定住の相談窓口を設けている自治体はあるが、地域住民が仲介役となり、入居後の世話まで行う例は珍しいという。

笹川地区のコンシェルジュに任命された折谷さんは「より多くの人に入居してほしい。伝統文化を理解して地域にうまく溶け込めるよう努力したい」と話した。

## 県が人口減対策本部

### 外部の意見参考に施策検討

人口減少を食い止めるため、県が準備を進めてきた「子ども政策・人口減少対策本部」が9日、発足した。2040年時点の全国の人口減少を試算した民間有識者組織「日本創成会議」のメンバーらをアドバイザーに迎え、県内の子育て世代や大学生の意見を参考に斬新な施策を検討する。

統計調査課によると、県の人口は1998年の約112万人をピークに減少が続き、今年6月現在107万1177人。創成会議は2040年、朝日町、南砺市、氷見市、小矢部市、上市町の5市町で20～39歳の女性が10年の半分未満になると試算した。

対策本部は石井知事が本部長を務め、05年にできた子ども政策推進本部を母体に庁内の全部局長で構成。次課長で作る本部内の検討チームには、地域のPRや若者が働ける企業の誘致などを進めるため、観光課や商業まちづくり課も加わった。検討チームは11日に初会合を開く。

アドバイザーには、日本創成会議メンバーの加藤久和・明治大教授のほか、日

⑩（記事提供：読売新聞）

# ポール手に全身運動

## ノルディックウォーク

### 負担少なく健康維持

### 観光客向けに講座も

日課のノルディックウォークを楽しむお年寄り（29日、朝日町笹川で）

2本のポールを両手に持って歩くスポーツ「ノルディックウォーク」が、県内で広がりつつある。歩行中の足腰への負担を和らげながら、効率よくカロリーを消費できるため、高齢者などの健康維持のほか、観光に活用する動きも出ている。

◆高齢者

朝日町の山間部にある笹川地区。夕方になると、集落のあちこちからポールを手にしたお年寄りが集まる。談笑しながら、舗装路と砂利道の約2キロを40分ほどかけて歩くのが日課だ。

6月から毎日のようにノルディックウォークを楽しんでいるという竹内キミ子さん(72)は「高かった血糖値と体脂肪率が正常値に戻り、医者も驚いた」と語る。別の女性(79)も「ひざや腰の痛みがなくなった。毎日歩くのが楽しみで仕方ない」と笑顔を見せた。

同地区は昨年10月現在で、65歳以上の割合が47％を超え、県内でも有数の高齢化が進む地域だ。住民の健康増進に役立てようと、小林茂和・自治振興会長(67)らが今年2月にノルディックウォークの指導員資格を取得。定期的に講座を開き、現在は地区の1割強に当たる34人が楽しむようになった。

小林会長は「高齢化が進むことは避けられない。ノルディックウォークを生きがいに健康寿命を延ばし、高齢者が笑顔で暮らせる地区にしたい」と語る。

◆観光

ノルディックウォークを観光に生かす動きもある。立山町の自然公園「グリ

**ノルディックウォーク** クロスカントリースキーの夏場の練習のため、1930年代に北欧で発祥した。ポールを使うため、手足を同時に使う全身運動となり、普通のウォーキングより消費カロリーが2割以上高いとされる。ポールは2本6000円程度から購入できる。

⑪（記事提供：北日本新聞）

新聞　2015年（平成27年）2月2日

## 新川地域発展賞

# 本賞に笹川自治振興会（朝日）

新川経済倶楽部（平野明会長）は1日、魚津市のホテルサンルート魚津で新川地域発展賞の授賞式を行い、中山間地の定住促進に取り組む朝日町笹川自治振興会（小林茂和会長）の「かがやきプロジェクト」に本賞を贈った。

謝辞を述べる朝日町笹川自治振興会の小林会長

1984年から経済、文化、スポーツなどで地域発展に貢献した個人、団体に賞を贈っている。ことしは9件選んだ。

平野会長が「今後も活躍してほしい」とあいさつし、各受賞者に賞状を贈った。小林会長は「皆さんの支援を受けながら取り組みを進めたい」と述べた。

▽特別賞＝石川歩（魚津市出身、千葉ロッテマリーンズ）▽地域社会賞＝宇奈月モーツァルト音楽祭実行委員会（黒部市）前沢カンナロード実行委員会（同）▽奨励賞＝島瀬登（入善町ジャンボ西瓜生産組合）櫻井麻那（魚津市、呉羽高2）▽青少年育成賞＝魚津東部中男女駅伝チーム▽新人賞＝中村成実（魚津市上野方小6）飛山大河（黒部市高志野中3）

⑫（画像提供：くらしたい国 富山）

ダヴィッドさん、知子さんと樹（たつき）くん（3歳）、花梨（かりん）ちゃん（1歳）ファミリー。体育祭やお祭り、草刈りなどにも参加する笹川地区の一員。

# 朝日町 笹川

【あさひまちささがわ】

日本海と新潟県に接した朝日町。市街地から一歩入った里山、笹川地区には、子育て世代の移住者が増えている。

## 子どもたちと安心して暮らせるご近所がある

笹川で集落内の空き家を購入し、昨年4月に移住したのはコケシュさん一家。ダヴィッドさん（38歳）と知子さん（33歳）はニュージーランドのキウイ農園でのワーキングホリデーで出会い、結婚後は知子さんの実家のある魚津（うおづし）市へ。4年前には朝日町の農業法人に就職し、最初は町の市街地の借家に住んだ。

「家族も増えたので自分たちの家を持ちたかった。でもローンは組みたくなかったし、昔ながらの木の家がいい。知り合いや親戚に尋ねて空き家を探しました」

とダヴィッドさん。家は職場の同僚に紹介してもらったが、笹川は以前から何度か訪れて、気に入っていた場所だった。知子さんは言う。

「山や川の景色もきれいだし、近所の人がいつも声をかけてくれる。子どもたちが安全に暮らせるところなんです」

庭には小さな畑をつくった。ブルーベリー畑を持つ夢も、地域の人の協力で実現できそう。

「お母さん仲間が集まって『里帰りレシピの会』もはじめました。保存食、畑づくり、昔の暮らし。笹川のおばあちゃんたちの知恵を教わっていきたいです」

「笹川ではご近所がお互いに助け合い、安心して生活できます。まずは暮らしを体験して、若い人に来てもらえれば」と、笹川地区自治振興会会長の小林茂和さん（66歳）。

昨年9月にスイスから移住した勝田民さん（45歳）一家。民さんにとって笹川は父の実家で夏休みを過ごした思い出の場所。夫のクリストファーさん（62歳）はスイスで残務整理中。